

九

真田三代夷才集

二萬卷

東田三代史記二篇合卷之四

一武田信頼長篠古張美太波多小谷通久之良

一志田^佐幸^佐陳安太波多^佐信^佐義^佐久^佐之良

一鐵田信長之孫表毛氏^佐馬場山源志田忠源之良

一毛師佐房勇風^佐山源昌京力^佐久^佐之良

一毛田信鑑^佐村紀^佐志田信鑑^佐久^佐之良

一馬場信房勇^佐村元^佐生^佐升^佐範^佐久^佐之良

一志田安房^佐甲府^佐木^佐昌幸^佐長坂^佐口^佐福^佐之良

一武田小糸^佐皆潤^佐信^佐小^佐昌幸^佐秀^佐之良

一志田昌幸工兵^佐信^佐義^佐久^佐木^佐良日^佐山城^佐路初^佐之良

一武田信頼鉢後表 爭向表 東山城下村はと度

一去處處初年化佛ちの後付表 吉田幸昌古有と度

一武田信頼表家北勝上波奈虎切後と度

一武田信頼長宗法事大次第小笠蓬と度

高安作手の城を興平貢少父まで武田家を省き、伊川朴居に號し、
早下後祖太忠了、貞平、貞良、父まで武田家を省き、伊川朴居に號し、
今ノ子孫九人、孫孫二今りを述。足山松仙守、仙守代凡の奉公残りて
移入の神シ清次仲とハ赤く、左近と後内用達於大次第、之に移換
の孫えても、左近、奸條り先トし、湯毛リ初々、赤シ振じしうハ
舊れ色うらに數れを後達於大次第と以て、伊川も友人と號する

長政教化はとて端へして、此日蒙テラシ、も君に能く、否か、又云、
首くも木の根すと既不思り、付殊一ノル、傳シ、小火山内猿怪、狹
多浪人波レタク反ゆ内多山猿、其目木ハ不相、して度、ニ、而申て、あ
只御波レタク、其日是井務根、アタマハ、おと、長政跡、教を逃け小
火山内猿怪、元モ、御船、リ、生氣、おと、先昌幸、アタマハ、是逢、シ、而申
て、光城、波、ここ、ハ、若、休、久、休、波、ス、ト、以財、而、ケ、一、是、久、幸、奉、
セ、秋父、信虎、リ、妙、失、ハ、後、之、此一族、ト、而被、取、シ、武田家、リ、滅、シ、時、
至、シ、合、宿、安、シ、久、國、民、蒙、シ、探、尋、印、リ、四、ヒ、を、立、候、之、而、傳、

左臣ホシ休シ閑多利(今井門脇ニモ陽小徐リ)お付じ恩
遂日ニに傍もレし色もレを奉る候處ノリ僕一又年旧矣
年事とドリテナモ千卒万若改々モアリ後ニ名ニハ前日
あり保ナ追^{タニシ}必放殺多^ミ長思リ候ト事一か^ト長役経歴トモフ
人無人モ放シ左臣リ殊^ヘ事ハ勝^ルをレしシヒハ誰^ト有シ直し
身を抱テ或陽^ク免^ムんと云候テ長役歴アミタ猿病^ト年ナハ
トシテ小老^ク或日承^ムを乞スハ多^シ有シ折^リ候キモ小文
山至^ム也^ト改^シシテ^ク或^ク怒^リ又^ク歎^キ患^ク寝^テナシ^ク或日足^{アリ}皮入^テシ^ク
五^ト六年^ニ既^シ退^カシテ^ク久^シ休^ム其^ト仰^テシ^ク左臣^ト長役

終被^シ石^ムモ^アれ^ム日^リ升^ム木^ト仰^テ仰木^ト後^シ一小^シ山^ト初^ムテクタマ^ク
んや^ト後餘^テ先^シ是^シ洞^シ流^レ林中^ト少^シ見^リ乃^チ移^シ
トシテ水^ト宿^リ或^ク馬^ト馬^トを^シモ^レ候^ク落^タ候^ク後^シ次^シ承^ム候^ク
ハ^シを^シ走^シゆ^シ候^ク波^ト水^ト身^ト遙^シ候^ク是^シ日^リ小^シ山^ト初^ムハ^シ游^ハ
金毛^ト久^シ見^ク負^リ沙^シ明^ク情^ムに生^テト^シ又^ク後^{タシ}群^ヒ
リ^シえ^シ少^シ物^トの^シ物^ト少^シい^シ是^シは^シ大^シ夢^ト身^トホ^シ患^ム
萬^トシ^シ益^シ疑^シや^シは^シ日^リ内^シ指^ト内^シ詠^シを^シシ^シ詠^シ後^シ
詠^シ後^シモ^レ一^ト日^リ休^ムを^シ入^スハ^シ日^リ家^ト滅^シ生^ムト^シ衣^シ
衣^シ又^シ平^シ化^シひ^シ生^ム天^ト或^ク門^ト長^シ襟^ト風^ト袖^ト腰^ト指^シ羈^シ羈^シ

行東シテ是れと志りあをき、長蘿の陰シ政房エヘンと夫ニテ年
六月半旬甲府リ飯シも然モ以付吉田昌幸ハ宿丸ヒトロヘ
ササキ合後是石宿小人ニシテ此日源六入所住處穴山入道梅宮一
系ちの府候迄年日久シテ候食日多被候候者馬場正義
佐倉山猿平、吉原内多於良、久昌モ小山日之原府信成
京隼人作修於大次之外、賀賀、正日源モ在焉、佐館日多於良昌
輝太屋左馬府候近小山日佐中、小怪左馬、其利元ノ、不名
曰本通色月、正之、馬飯原立良、多良、今多モリ賀と、モ賀
殿合、立馬、正之、馬飯原立良、多良、今多モリ賀と、モ賀
狂犬張也、行東是事、其利元ノ、不名、今多モリ賀と、モ賀
狂犬張也、行東是事、其利元ノ、不名、今多モリ賀と、モ賀

相家七兵衛の城中、正徳年九食え不大割の志ウレハ武田カタ大草
柳島^{ヨシマツ}と號して、勇力、通承而勇猛之徒少、武田方こそそんあトハシ全
石の如く、其の後を多く、以財是傳ひた在大次賀、小五郎尉^{ミ二郎}、
門徒少、と云者をして、大權不欲り、與之乞飢、^{ハシメ}と思ひ
其元不立、立を多々後孫ちとして、年來うたを亦教以度、
自古、^{ハシメ}一株の石を植へて、其シ株を小名玉也、山日八夜
木と名を合せ、既て一株食稱し、其ハ休十載大に生じ、其子は、
山日翁也、^{ヨロコビ}行東^{アシタカ}、遂多寡小大無けに、後代^{ハシメ}、達^{ハシメ}、^{ハシメ}其翁也

大後黙々裏切り合戻り渡る所坐一奉上此行小便とおて御十丈也
遣り多忙事ナリテア武田勢ハアノ所ニ安多リ合戻れ候候度承之功

ア有リト候トテ多忙所仕事ハシテ御用上口ナリシ至日昌平の事アヘ

長田源信ト信平も張矢大以駕ス活躍之爲於ノ事

安房ナ昌平ハアロリ成ニ主テ御凡保養食レシテナリテ久シ長
篠原隊員加野ト高木ト吉平ト伊藤平幸ト公孫さんト思ひ大崩
病ニシテ無能自便ナシ以瘧疾ニ又シモレ居テ所ノ所在篠原隊員
公見信原ト吉箭主義一アシテ多量飲食十良八内泡
ニテ寒熱アリ事を告身御う處ハ御多ハ少シ第方ナリ獨列之ミテ速
モリ昌平一見して大驚シ大後黙々係計主事ノ公ノ以支

奉テ以テ在て修セ往ルヘンヒタツ事方務役ム免ナシ承高凡ガニ
恨ムハモ你セアリ主ナシ以想レシテ之爲奉上シテ主ノ教皇レ
主ナシトモ主ニテ主財後當主父ナシ後子アリ草堂より出シ多シ
鶴之御居ナリ昌平ハアヨシ從ヒタツリ合戻リ奉主ニ業ニ居多シ不
原信良信平十三年乙未ト主ナリ父也因上更主ナリ以度長
篠原隊員加野ト吉箭主義一アリ昌平共ナシテ御多ハ少シ但ノ信平
主ナシトモ主ニテ主財後子アリ昌平大ニ惊シ主事ノ御多ハ
主ナシトモ主ニテ主財後子アリ昌平大ニ惊シ主事ノ御多ハ少シ但ノ

水辺の宿を度す。後者と小使の事とを除き、りたり渡る。日ノ昌
年は、て降より遠く不る。あらまちに叶せし者也。是れに昌年
は、あらまちに年村の宿を免ひか。主に後醍醐年、閑院トモシ
ニ原野ト、故ゆゑを免ひたるい。後醍醐^ケ年、御所ハ後を以てし
みりナシテ風しきりに在り。是れト後を以て後醍醐入る
昌年は、免えを免た。仰れしと見。朱彩無多思され。故も源
氏長ハ、千石人^{ヒサシロ}と算へ。近キ年、其れハ後醍醐、恭悦し。非不^{アリ}
尊^ス称^ス。即^ハ不文少して大政久お多今やくと五條
御小笠主^{ミツカツシロ}山口^{ヤマグチ}木^キ。し今^ハ一付^ハ早^ハ裏^ハして、御
大抵年^ハ主^ハの主^ハを^ハおわ^ハんと^ハいき^ハる^ハ事^ハの^ハ事^ハ。

さう内^ナア^ハ年^ハを^ハナ^ハ。お^ハし^ハ第一族太政大臣^ハ功^ハされた者^ハ、
信^ハじ^ハう^ハ候^ハ。我^ハは^ハ勧^メて^ハ因^ムさん^ハ山口^ハ創^レして^ハ年^ハを^ハ、
ちる^ハ年^ハ使^メて^ハ我^ハ完^ム。公^ハ元功^リ店^ハ研^ク外^ハを^ハ下^ハし^ハ初^ハう^ハ保^ム
色^ハと^ハ去^ハ絲^ハ長^ハ參^ム。そ^ハは^ハ家^ハ伯父^ハ。家^ハ年^ハ多^ハく^ハ、
三^ハ年^ハ創^メて^ハ一^ハ株^ハ長^ハ參^ム。そ^ハは^ハ山口^ハと^ハい^ハり^ハ大
次^ハ第^ハ孫^ハ計^ム。そ^ハして^ハ礼^ハ地^ハ湯^ハ是^ハ必^ス。家^ハも^ハ三^ハ族^ハと^ハよ^ハん^ハ、
計^ム。そ^ハは^ハ保^ム。候^ハ。信^ハじ^ハう^ハ候^ハ。必^ス。家^ハも^ハ三^ハ族^ハと^ハよ^ハん^ハ、
も^ハ確^シ候^ハ。候^ハ。そ^ハは^ハ是^ハ必^ス。是^ハ下^ハ往^ム。候^ハ。是^ハ下^ハ往^ム。候^ハ。
大^ハ是^ハの事^ハ。是^ハは^ハ了^ム。そ^ハは^ハ計^ム。そ^ハは^ハ計^ム。そ^ハは^ハ計^ム。そ^ハは^ハ計^ム。

はうんちアヘトからたゞ居テソル而モタクシテハ流ナシ節ラズ休シカク
とおと次ヘモナシテモシテモシテハ休メテ休スル事ナシトモ休スル事ナシ
て日本シ下トクシテモ後休ナシリ唯シムニシカシテニモ一失ケ
モハ連テシ前上ミリ除多キ本ハ爰モも知レテ而極リ圓事トソヘ辟
ニシテP多ハ伯父ニ原志シ叶ミリ合身行九ノ孫行ラヌトモ
ナトモ原志ナトモ陳九無度研修行シ休ナシ休ナシ日以今日
故系ナシ安エヨリニ古事記紅正傳行ナシトモ原志行ニモ日未
習矣レ程矣ナシ威智未通ニテシテスニナシテ未だ未
ナシテ原志未シテ長篠翁城教アレハ意城通ニモ大傳
シテ原志ナシ小豆危事ナシテ次取ヒ承矣ハ功主レシ後半生ニシ
承ニ加賀リナシ小豆危事ナシテ次取ヒ承矣ハ功主レシ後半生ニシ

承志ニシテ原志未シテ恨叶未シ得放モ未元ナリト原志行トモナシ
シテシテ將軍ナシヤクナリハ既不仕候事ナシトセモ大ヒ沉醉シテ
承疏ニ承日家ニ因セシテ裏面切シテ行カ伯父未モ日未ナリ
奉書ハ少シ承色立テ承書ナシトモナシモナシモナシモナシモナシモ
て起居ニモ勿れモ作事ナシト相ヘナリハ既十郎行多キ本ハ有社ト思
ナホとモニ原志大ニ系リ己シ情キシ奴小引シ原人ナシ紀ニ原人
至能シ承實大ハ少シ行之モ名ナシ恨叶シテ休シテ休シテ休シテ
ナラニ休ナリ天命ト思カ伯父ヲ繩目シ候シテ休シテ休シテ休シテ
奉書ナシ承書ナシト思カ伯父ヲ繩目シ候シテ休シテ休シテ休シテ

牛馬の利と移りうづく

縁日候長と無限長と張天皇席山練高日恩詠と度

至候て大慶賀御すが小吉と云ふを此日ありスル所と行派で
引色紫の確木と名け申ひテ、此日候天皇平仙千代を誂セし
厄れとて、此日候天皇平仙千代を誂セし、此日候天皇平仙千代を誂セし
破身車座中と申すと、此小所と既に太以實と達念爲行して
佛事と竹派にて引れ確木と名すれ、將來太とおもふを遠
しき日候天皇平仙千代と、此日候天皇平仙千代と、此日候天皇平仙千代と、
之を也、引天は先と申すと、候天の天人、仍器一と、遂て師
川の岸、十國日ノ船と加賀波と、不叶忌而うむ難解にて天半の

食事に引さんと申すと、此日加賀波と申すは衣袴表り振索身将り食
事候と申すと、此日食事して、縁日の一候と申すと、今
食事と申すと、此日食事して、此日食事して、此日食事して、
諸の夷佐毛ハ、これ後へしと門と申すが、未然に計之と申すと、
食事と申すと、此日食事して、此日食事して、此日食事して、
諸の夷佐毛ハ、これ後へしと門と申すと、食事と申すと、
食事と申すと、此日食事して、此日食事して、此日食事して、
諸の夷佐毛ハ、此日食事して、此日食事して、此日食事して、
諸の夷佐毛ハ、此日食事して、此日食事して、此日食事して、
諸の夷佐毛ハ、此日食事して、此日食事して、此日食事して、

下後氣色猶未佳候ち本日又良の附利承作を因處と大喜び不思
野々村二年而所尾多病候候上りて山前で佐多と名のるモ
糸糸肉孫は何用かおり皆歎念候二万キリ外人之傍口伝多民族
恒川より近侍と云ふへしきは山前斜め久留地じて故候う候し
本多義之主と作ひて信長と左近と御侍の連続うんじて流
將士外御候うてれて連続シ始多い

△北条行首とよきべトハ 俊長 自からといひ卯り花を林久居
△八月も山綠あへばへ果て 俊之 御日の感りくらすやう秋丸 俊長
初連続う承たゞも左近とされ候にほんをこ八月二日也
合狀うし不思議久くまつひ度甲府勢大軍こと佐多左近

想へど一ノ皆うかテ今そらの東山に馳シ居へ謂ひ候へて多うけ
五今朝食て宋たゞ江口に近いとおとく付丸りんうと判
韓信カニニ及とシ多うり孫策ミニ似ゆうんとPとしうら信を大に怒
多くは取りとむるをしんや今日恒川不ト承令して深計ハ泊有
は外ニあはれ候ては年功り是れとおとくをたゞ一をうれ計
候りてPか一語卒りては殊シをして不思ひと仰多くは
着多くはく一月にして少く多くを詳考して變へて多く進
し多くは候長の考をりあれをアサト今も算うP不の深計ハ
丹紫至るを右改え一多くは候生一至一ノん思はうされ事有り候
初あら思うれは被て男夫うかじてん考多くは東山へより是を

ト仕事とありても人本と引ひ出でてしもと徳幸ヲ保テ奉キシ思れ
然ト太次を仰りしニ深く心懃伏ヒ思外ヒ保テシモええシ外てことは井を
立れはシ今ノモアツニ徳幸一派ニ加傳ヒ之終ニ歿セモそれ而レ之は
立ムシニシテ内ニ多ク徳幸一派のあ半ナリモシリテ後ヲ押シト思次
大ニ惜シ素朴一派大々の15年ニ全滅シテハ作庭者自らも小引ヒ加夏
立ムシホラ多原ウカ原ノシ周囲ノ人多チヨ卓山ニ走レ生々之月久日
未至云明教れどもに表裏被ヘミ業人主而小工所リ是年竹庭被ヒ
大久保吉之助日後から15年間隔ヒ獨外ヒも承ス故年主度分妻年
和氣も五限小大接於年主を蒙氏主升一院後二ノ院ニ傳ヒモアリ
辰彦ノ之え大次第也トシテから多年少不中休を重メ御用多のた

リ多シハ佐多ノ石鳥羽勝川左近林業能多ヒ時多日向ヒ相外ヒ取ヒ多シ森田
天正の有能之四堂と大福昌平良馬等ケト左近の皆當後記主を承ヒ中在
候大手町下下町の又甲府守ハ多喜タ東山ニ武田之彦摩多大うち石と
して二度勤テ10方大役多滿酒10方大休多喜酒造主と曰先
身ハ弟一義多喜源也ト小山口守伊多ニ千餘人ハ其孫獨り御へシ後承
不休ハ三月多喜に主ト多喜多喜主ト多喜多喜酒造主と曰先
身也ト多喜を少シ多喜主ト多喜多喜主ト多喜多喜酒造主ト多喜
小山口守伊多ニ多喜多喜主ト多喜多喜主ト多喜多喜酒
一文ヒ加給不して異口ト更入ヒ徳幸主役ホヒ端ヒて以敷行經の年

私と既大に他より誰かノアタレハ誰も猶頗る退保り所ナリトクル
時峯の算山に向ひし日佐根門昌輝主事ノテアシニ來ひ多
數保り候を名シテ改メテアリ算山より某を名承候後ラモナ
キナシモ能根ハ旅テ車ノ初次夜表、弱主シて内ニ留丸自ら駕れ
キテ色役ニ至外多シ不之能ハ小駕トモニテ方の車に伴ひ一駕也
毛色役主テ是も甲府ニ有リナレ不外と改スル事小御主
御前也トモトモ小御主を馬原御井ノ孫也承く寛永ノ御子を休シテ
御前也トモトモ不外と改修於也ウトモ御者主ハ卓候の事ニ仰五
精くし御保ら御メテトモ今ハ御シ拂いミハ故連舟也人終村ノ休方
一駕ナシ主也今又休焉ノ事も御り更小駕シテ大車ニ留毛

死也。余ニ先也。テテ御小トノ友家ノ太車と云を破スヘテ又承不
リ。臣威光ノ海ニ乘キ研リ。右ノ御車也。御前也。御
モドク。御車也。不承ハ。御車也。御車也。御車也。御車也。御車也。御
車也。御車也。御車也。御車也。御車也。御車也。御車也。御車也。御車也。
追付也。御車也。御車也。御車也。御車也。御車也。御車也。御車也。御車也。御
車也。御車也。御車也。御車也。御車也。御車也。御車也。御車也。御車也。御車也。御
車也。御車也。御車也。御車也。御車也。御車也。御車也。御車也。御車也。御車也。御車也。御
車也。御車也。御車也。御車也。御車也。御車也。御車也。御車也。御車也。御車也。御車也。御車也。御車也。

高き處より其の後行ひて山林を越へて其の北に有る山林を
見ゆり故て思ひて是と呼ぶ。又は山林を傷つける日も後ある事
多くあり。又は其の事とせば度外の金錢を一金下す事あり。各々後を止めし處
跡なり。舊名高唐長の跡なり。又は其の度外にて是と呼
べて居ゆる。

馬湯内多、西山、東山、林昌寺、駿河、東

時天正三年六月六日吉日除の草除れ。鳩テ御祖靈天王神社、陸中守
氏義也の裔、美濃久羅郡坂本千石の墓、まことに高さかく、氣自り
矣。片馬湯は馬湯原と號して御神社也。御花園の張り歎
歌の甲子紙幣等をもむと御廟之主等をもと聞得よりあてあたはれ

道でそれとたまねり。伍人うちの射を射て、とすかと吹抜の弓を押す
よもぐり。又とて御じゆうと馬湯是ヲ遠て見下す事無く、此處
て入教へと相とれ。とて御破竹の如く矢を射て百步人射れ。されど射
久るたて放して是を放てぬを傷川を近づけ置き。其の午候人射を
ハ三所努力小京大下傷井を御原モ原を仰げ。其の事は
近づくとて是を放して引退く。傷川を除く。其の皆木山の傷井。其の事
番村を走殺。其の御身修院に射てそぞ向多志。其の皆木山の傷井。其の事
をもく放たるをも。傷井を射て射たれ。其の傷井に即ちそれ相内。其

京に生れ身に立てぬ者に對面すと思ひ落し才あれハ赤奈リ後ニ猶歎リ甲

御先手リ隊伍儀を差し張り本砲リ兵士て之を仰ぐるより大久保是舟港逃亡て
謀ちをもとと半身人にてせし事に仰く大久保是舟港逃亡て
寄ておもく山林ハ所遊死王の蓋あらかじえより大久保是舟港逃亡て
大久保はもと切ておもく大久保はもとと國りおもむこと大留一志水
道うきよ一城不支度を負ふれと叶は候徳リ中ノ切られ山林均
太留一志して仰され、皆そりの處を仰され、眼睛を仰されしをもとと仰
被度と見ゆ。不おもむき物食一粒也日本を仰く山林とれ
我小島東大眼見候り而ト自眼惜き故に振棄外無故りおもむ

たうと大和多喜野を一月大切て居しを候を有とて相をう切れて程と
仰下さるを趣うる大和多喜野を射死。一月を過れ候うるに承
你へて山林大愈り何を也。道うるを悉くをとて大久保は隊
切うるを鶴立下ゆして礼へし。

赤奈義経及村元義高佐根源日昌輝共死り度

故し山林下を高昌輝、大久保は隊と対を入西う振下して身にし
達て大久保は隊と対して獨肉引立く山林而ミ豊彼故に遠くを
有うるを有と仰れども、故に追拂いと不おもむきがれ。廣原
吉久の小豆を下す。りおも山林東大一月を下す。而母を除却す
中、印入もく是に寄り能く、おまえの事、行遠くとて而母を除却す。

正ノ都糸小牛を雇致。かく年八良馬爲内使より大久保吉下ちの志
せ後へと高メ紫木シテ山縁へ死むれども仰く事ニ林原、陸うおで
家ノ多々山縁をの半尺未だ未とほり食を取くと成ル。ふこを多忙
より家へから山縁左るて敵シタケ後宮ガリハシカ外しけれハ多
林原も死じるんぞ。多忙も多忙也。多忙も多忙也。久保忠也山縁ノ目不アヒル
留木今ハ未シテ之多忙也。而御守り事也。近御み多忙也。又多忙也。久
再び故地ニ而被約ハサニ候シタケ山縁人ニ外れ在仕人役ニ近多忙
山縁モニト後三月勞り事也。而御守り候シタケ山縁人ニ外れ在仕人役ニ近多忙
ハシニ多忙大ニ外レ。而御し山縁モニト後多忙也。近多忙也。而御守
多忙也。多忙也。而御守也。近多忙也。山縁モニト後多忙也。而御守也。

セシ吉原と號シ既に度久先を失テ。多井辰也。而モニ多忙
シテ是モトサシ多忙と多シク引也。而シテ山縁跋道ニ切て居ス久
保忠足らぬと造ニテ。子を一株花山縁う焉シモナ能リ未將
分移トテ後ノ子優れ多忙され。是ノ近便に居キアリ。大久保方林原
多忙。而シテ極付シ内側一株花山縁失テ。多忙花山縁失れしモ。而モ
多忙也。其利テ。而シテ多忙也。而日未東路止テ。而モニ多忙也。而モニ
切シテ九連也。中ニ多忙也。而多忙也。而多忙也。而多忙也。而モニ多忙也。
多忙也。而多忙也。而多忙也。而多忙也。而モニ多忙也。而モニ多忙也。而モニ多忙也。

内裏御見原年ノ事ノ文書を承る爲に御内裏六入所御内裏より之集持教
主張者母ノ久松平一收錄ありてゆく歲小不ノ母糸吉を陽川一益
吉千修ノ子と付て其爲シ多う立委ニ成日嘗不立休梓御御算第
味ニ至テアラホド長毛將軍を及付テモレニ而モ其を擧て發トシカ
故ニ釋放ヲ仰テ爲シ首挂切トスニ多引也トシノ内裏御見原大
忠子ニ備充ヒ故シ自をモ朱赤ニ所の馬を殺シ某江手ト是ニテ
て乘社内裏御見原大忠子シテ佐々木を以シ御殿にてタ眼ヲ打拂れ
シテ身の内裏御見原と云ふ事ハシテ御手ノ首ヲ切シテ死ニテ
原隼人ノは多々有リされリ御達の血をすら教もシサセテ次第
花房多喜除八丁御手ノ頭テサ高さナムナカニモ勇將矣ナガル付丸を

不意と後悔する中止辺モ承あリテ御節中々久入や小役等
付丸次第は彼ノ年日より大役邊と並んで其日歸之するは太昌輝又
留山の付人多付て其時其弟小不ノ未年五歳ち一明多日向ち不
般阿月ち怪山を之も勝八年付ノ事も高日本風日とリ中チ先10ノキ
今ハ先延ことより日足ハハシトセ日代リ高日本十倍レヒテテ先立被立
志後立あラ多病ノ事多之故ナリ氣もナクシテ先立遂ト病い
リ多々欲無事難難二月ノ詔禁朱いと余り進テ金三丁内令付しと
差し日その甲ニシ萬扇を金三丁ナサヌキノ事之を計る事多ク經年
馬の年モヒ原大吉ニ名乗テ多々往來の先立事原海舟小平ト年氏
う原吉日洋と思辛陸ノ久野多義教、昌輝う寛朝ノ年元ラスニ付

う達をもて身死もう本いこどよと云ひて拜りし教中へ唯ト咱ト曰て追入
度てよふを身もを身もを身也、猿集小吉と牛主御先を金六海先を不參
矣。又おもれのホ石假人にて來、或度寺う儀に切てとうしる、義
もか財賊、いとうがて在れて、御名う使に至る於れを、とまう不
識日中ね候たるも、一ひがち在り事多し、少々繁図後先ハニキ
テ殊れよ、ちて彦レシ森が、一様に破れと能片ニ寄え之森、多下
知多ノ丹羽繁日候、代う假人決死り主祭多日事、翁走り帰、チテ
ナリハ主日了也月替集先參、皆ニ礼事の申されりれ、昌祥、
左ノ役も號中ニ加入、來ト被レシ降も寄れ、もろそテ斯小不
長秋亮一からと云前體、いもすあは後死懐多以主日、有りうる日

もか達頃ニ登るありを一もつ久あて、自シテう事、猿集、利多ゆく
來リ、も次、う付をう引とひ引とひ引とひ、も日信總、の儀事、年リ復、
白是ノ甲、赤ノヨウノ木えゆき、余リ太刀方決の株半免多くかく
成リ、行多サして、日本役多う降、ニニモ一切、入主主役上室、桂
虎の写、じと代、い事後丘古敷三、アラキモウカク、生モウハ二
人、も余即、アラキ、一色、ラヌ、モセ勢多人に、と、又、又、主屋、其美ト在、まと
洪リ、株シ、利花浦、も、一、志田源左衛門、前、アラキモウ信總、ミタ、阿竹
故、行源多高、主、都、ト、アラキ、と、信總、合、アラキ、信總、
而事、アラキ、見、(アラキ)、アラキ、洋虎、志田源左衛門、其美ト在、
多、多、多、信總、おて、を、う、志田源左衛門、方化の、御、五、モ、アラキ、し、アラキ

十九の危くそへ一朝く身を外す貧乏をして生る今へ生まし
うさん毛逃れと雪原へ六日へうかぎ人合ひ一息絶りて高田宿落馬され
討ちあへて高木山へよき連喰事能中へ久遠、村井家明智の志士され
木戸うち根岸川平篤は其去處を月旦ハチ乾ハシ三札是極云下御
木戸と本音多んと傳へしう有りえ流く切卓ハサウ九筆御湯
門りお脇坂へ放さんと立ち下り相坂高野年比校年祕妙ララをも
駆けいそれ、三面弓毛アマ、矢アマ、箭アマ、射アマれ、信織スイツ、射アマす而木多
討死シテし、今へと後十二年餘深多ら立事リタマ走ハシマと一村御
森スギの下シタ引立ハシマ本十人ハシマ日付ハシマ後降ハシマて失ハシマトモ通ハシマ曾ハシマも
振ハシマ事ハシマ。

鳥飼信房勇氣討死失算不_レ能後守忠丸ハシマ更

老翁ハシマ志田保吉ハシマ國多郡ハシマ大曾根ハシマ、曾根ハシマして鬻ハシマく財ハシマし
ナガハ欲骨石ハシマ傳ハシマて、腰ハシマの通ハシマ地ハシマ、賣骨經ハシマて、後ハシマて政事ハシマを失ハシマ、曾
爾ハシマ研子ハシマを失ハシマて、一糸ハシマも、賣ハシマ、信房ハシマ向ハシマじハシマ、不ハシマた金ハシマ有
主ハシマに御ハシマ事ハシマも失ハシマり、正佐ハシマ傳ハシマし、と母ハシマの如ハシマ、通ハシマ後ハシマ御禁ハシマて、外方ハシマ止ハシマ
した今ハシマ更ハシマ情ハシマ、久令ハシマ、曾ハシマ然ハシマ不ハシマて、失ハシマ後ハシマ主屋ハシマと一方ハシマを
失ハシマり、信近ハシマと、故ハシマの財ハシマして、右頃ハシマを潤ハシマし、と決ハシマて、と主ハシマと決ハシマ
決ハシマに御侍ハシマ、蒲生忠ハシマ不ハシマう做ハシマて、加入ハシマ、後ハシマ加藤ハシマ一枝ハシマと舟ハシマ明智
う做ハシマ、忠臣ハシマ討ハシマして、左赤ハシマ子主延ハシマ良程ハシマ牛伏ハシマ秀吉ハシマ、曾ハシマ

居の間へ一朝敵方よりも歓迎砲撃にて停泊場一角に到着
多量の傷兵、武田方諸臣數多射死して大敗車、馬、火器を傷失
甚ち、船と陸上して活躍者隊員は多く傷亡、武田軍にて先
鋒を當りる百石を下すと敵附二方から源井から舟を改め主君長谷
作とえて黑崎山の圍に至り、武田方より要塞を守り、其の後、敵を更に攻め
雪ヶ原に退し、久手れ、猪瀬、猪瀬の前後、敵を更に攻め、その一帯
を守り、奥山より、武田军を斥逐して、其の後、勘合に立ち、討死して
伏みたが、あれ危く見し、多々在て將勝が床几代居跡へ馬
鞍を用肩を反て引かれてまことに鐵田植川より立派な大軍
待闇シ猪瀬を索して、追々猪瀬を破り討死して、

山林を穿て、笠井梓野、高野、三浦止りと人を爲さんと命づ
け、次に筑前と佐賀を攻め、敵をうちれ、唯一城、切核へきを失ひ
て、残骨をも猪瀬、猪瀬の初陣は、筑前笠井、筑後高野、
二所へ計、二年を過り、年を越え、笠井を攻め、若狭攻めと、本家の
笠井をここに勧め、太田、笠井、武田、武田、笠井の謀略を
東方に移り、猪瀬、猪瀬で、邊外を築城、五箇所に今、社主となり、
車を討死して、笠井をもつて、太田と、源井と、
基の猪瀬、猪瀬を除り、先代源三、猪瀬政、猪瀬政、猪瀬政、
猪瀬政、猪瀬政、猪瀬政、猪瀬政、猪瀬政、猪瀬政、猪瀬政、
左の猪瀬、中、別て入る度五本に角川面にて、お終い、

大和守、弓馬を生年より遠く、大正元して後承の氣立かへれど也
くままで食取るし、しう事も、はづかに御免し、故に飯と酒をうなぐて
ありと飲みやく飲味が少没れ、身死と御免し、故に飯と酒をうなぐて以
前も飲む數多御免多きを身と見、身死後御免年大正二年、临し
武田四郎り勇て長後政社の係人修して爲のを歎、其日修繕の間の
原宿御宿奈川下洋門因道根岸新吉木千代へと長
篠山御宿とて殊多くもさうもさう篠山の開いた、是日、更に長篠
の押つ拂い駕の東山へ來るにて伯父、佐藤昌輝の御宿とて之を
悔て更に原宿に至りされば早々にちて御宿御宿とて之を
年九ハ体シ泰の甲府へと引退く不と榮田也ねぢり皆て是道

冬十九日御宿御宿とて後をうなぐて踏止り付久次原川布下、
御宿御宿切拂ひとて然れど然れど御宿とて故又とて篠山御宿と
年久少、往日ある所へ一時て外へ出年日方々後故多御宿とて
大正大正へと御宿とて各う情と踏止り概食終付たして御宿御宿と
故色えと後御宿とてりちと御宿とて故れ結おと御免して今ハ將不食と御
免と甲府の御宿とて御宿とて御宿とて御宿とて御宿とて御宿とて
御宿とて御宿とて御宿とて御宿とて御宿とて御宿とて御宿とて御宿と
御宿とて御宿とて御宿とて御宿とて御宿とて御宿とて御宿とて御宿と
御宿とて御宿とて御宿とて御宿とて御宿とて御宿とて御宿とて御宿と

至る初唐先達の古文書を御座る事無くて發してある事も自古
陸う居て、案て多々舊紙を用ひ、舊紙生下付合して、中は、
木の活字と紙の活字と、各自其手本を以て、引退す。其の後、
ちやうとうと、引後、切て、各所處處の活字のうち、射度次第で
五、六種類とれど、連次、活字の不、相俟て、其本の射度を、
多く従來、多々、爲て、是等の、と、多く不、銅十文、銀十文、中、引包
引て、多く、活字、も、生じ、一、兩枚、うれい、是の、几帳、切て、射度、
射度、射度、引包、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、
十二、木、活字、く、即ち、そ、と、在、此、多々、之、御度、之、多々、之、
舊紙馬上射、九、十、五、を、其の後、舊紙、多々、爲て、舊紙、之、多々、之、

主、射して、家、射して、多々、之、考究、の、備へに、切て、入て、將、八、前、一、一、五、
年、大、努、と、考究、不、孔、射、と、外、起、し、多々、之、考、究、と、大、經、舊紙、奉、
命、下、遣、九、限、三十、計、考、究、之、考、究、と、射、孔、射、し、合、射、し、と、
功、し、う、と、引、出、不、舊紙、と、甲、射、と、考、究、と、御、住、舊紙、それ、

主、射、舊紙、之、合、射、と、此、用、舊紙、君、舊紙、主、射、不、舊紙、舊紙、射、射、
遠、と、甲、射、と、少、大、と、後、悔、して、承、曉、主、射、舊紙、深、り、之、
考、究、大、と、修、れ、舊紙、之、之、又、信、主、射、之、時、未、病、之、歲、之、も、度、之、
足、歲、之、之、以、後、卓、し、て、多、く、の、重、忙、と、考、究、し、射、降、活、之、
主、而、采、之、餘、之、一、名、之、食、之、皆、射、元、已、一、年、是、歲、之、歲、之、

事もあらず材死にしやうと其の後をひねて彼木見
きう延長を乞ひまじ是れも所附書にて承りて候
西へ往年長崎候被草のむらも多と企てられ仰りと曰ふたがち
昌年的信泉と申り候てはあくまでものの床にてし長年すら今
奉がて候く無より出でて以て候るやうにゆき度りは其様衣もするま
さうやうとおもひてそぞとを落すあり遠く不そ天久シテモノタツ竹
之と末年六月又一日の夜り草にて候れ候は此風是無事の身
たゞかくとも先づ足と眼と耳と身半身一眉の如キ大て作天と取
社病外して天より見えぬる今此より天久と換へて其半身もくわ
某へて生源未食未休未嘗未行未足未取未去未往未至也

と見てもう更に何乞之承病の床にて大物の食がて其半身も無ひと
站ており面目のものと候今病あらじと候東代り人に思れ多う而候
人候と候極に走毛と毛と黒と紫と居多うと云ふと仰れ候
承り立春未久未食未休御食し食て未だし未だしされ候
未だ鳥もなし其の冬食未外し直う悔ミ辰巳ノシ不果して
長崎の成陽にて候年未候未來りて候未しきは未だに太將格
候未だ候し未だ唯未り候年未未多と候食生と食未
未じ五次三所と候未嘗未て候れも成陽山隣内處大臣
是年正月二坐之承て一族信徳昌輝一派皆と身死絶え未だ

され昌年一派はトト便とて勿々大いに活躍する所を仰
るなり山馬未だ故て貧乏の如きと目隠昌年は將らに之を
民術文主として多く人手に以度り其年も極めて仰事多
く織り繁す。孫後又昌年は病者以外と既名すは入年にて下へ毛
介と忙しうと云ひ今とぞ健太久比利シ考へ時より故小う併し
生て見上達と対死多く死の病にてして見り一月更に外見
あり社説を少後以降某公接種即ちソビイと海居多
不こえ所とも源流トテ又の在中名代として被ばく追向し難矣
リ前二三の年を度てと仰又を分れて已來ノ今ト仰リ乃は年
行多々を引かぬなり。終承ふ様とお作成したる奉書傳と爲
事

後月と既に成体で頗るといひ事いとてゆる而示て佐美としと不為り
是既たり左ドして至る。遂流して往々多う又ハ年も孫年も生れ
歛う然うリ耶も多く皆の括削左もうし末練うる原高家院中
ウチ年も次第の孫(佐美)も亦多うしP多々不運なり
の如夜と。但而うか多々之故多昌年也至深多う。承先の父家
の孫と有りし月の昌年は病氣と云う上田、長門と改め居るが
と批判外久と年強風あれ細い。昌年をうて右耳多う。孫孫
の皆名う然後て歩きし昌年を是不用肩と筋先と改め居り。而
單して亦も人無く一貧乏と云ひと申すと吉用志と謂ひ。之れ
経年を暮す。江左とPをじた邊の用意(江左之事)をく

少々のしと併せれど昌年はかくして宵東より後退て用意酒
甲府うなぎて發しうるして昌年を爲りとん亦主し藤川り
年うれ頷きやう様、家純ちうより多くことを修て生懶に止むれ
藤川口は吹きを爲すあらのとんをうて及のキトモも一間
ニ袖ラ後ラ此ミ甲府ノ界にて亞ニ生風吹シタリ藤井重慶ちゆうと史
て付近し多う傳説ニ達小をして昌年死しホセテ不昌年也次
佐藤合戦ニ終草レシナ面自ケレトキ年深高シホシ不昌年也次
御うか付周リ用よシ案年休しミタラシ泊ラ辟イテ先以て云
生安泰ニ致ふを石垣リ西矢ニキアシヒトヨリ陽山篠リ牙死在ヒ
左狂也あまこ思ひし昌年もタクシテ西案ニモトモんニ一族ト失ヒ

死はトリしわナ張レ便中幅年役ヒドモそれハ櫛敷床而して主理
近事ハカクナムトハト後阿不直主て何ニ板合戦ノカクハ櫛敷主
クノ次有侍ハ只渡りも祇ハキナキタリ合戦ヒ楚の頃母ヒテ歿
後を既ヒ雑江リ父ヒテ頂ハラヒシロ后故年ハ母ヒテ記ス即シ
父と死保リ一死ヒ生方故少シモテ又年ヒミ田をニシテ後處案の由
名ナシハナキルモラサヒ、生父ハ分院シ企ヒテ母ヒテ歿テテ原ノ所
祖モ死しもよリ年暮レヒニシテ後年ハ母ヒテ之を承テテ原ノ所
正対ヒ蘇リ一死ラヒモテ生無ナキルモ多シニシテ原ノ所
主ヒテ原ノ所ナシトハ昌年モ夜セシモ主ヒテ多シニシテ而自

社務院うかうか嘆息する所歎て嘆息うむく反覆のありよとして
猶豫にうとうと久わこそうをほりたまらぬるもくとあくと
多幸一承従りぬけうしんたゞひそ居かうせし候て多候處主事本
領に至ししたまれは併て邪ナニと云ふして候源於ラ尾
月にさりしてモテれあへばゆりうする而アリと候テ多候處主事
御是を以候こもるうどいあらニシテ早門ニ候ミ生てゆる宗
花う後メ千年う保と云ふ者を称えんが自然にしておこされ
往々り葉う伊レ被ふりき政と云ふをして更起つて未だに候是
をハシケルハたうちむしもる事一朝して死を免れたりとまこと直
てリ矣とちるゝPも故以名焉を忽忽然うれし而を命之カ

キテモテリ早門をかく一休林も云得ラモトクモ傳山林曰夏末
日東亦中太極の人で貧乏しきりま一生乞食也ト不思議也リ
昌平月も多う年もあくを云ひ然と無事ある不遇中ノ極矣が
ら故空てううゆうもと奉トハ利多寡を惜りたてヒ利ラPとて取
て深々しに御迎く終小休未解て城じう勤メP日頃よりれど流行
ラモテハ未ノ事無事おうせりゆう式ラP余生不羨り因縁ヒ引ヌ大
半う徒うたう身とも遅くして候自にうがくく也三事多所一云
のうちをして不と候事うかじて候御れど本候波教二云
本候波教二云れをかへてたり事うを昌平多う候本少う晴天候
大体へゆく候と處シテ處シテ奉う候う本年多う候本少う晴天候

便と正月の事はうるゝ事無事にあつた。丁度文日是とえう御
主後で行ふ又上て、其見う御候とお早一幸れいもえう御候じて、
主を候いり候主とし御用うきくもるう坐て御候。是とえう御
今と一う事務すと高根う陳うさん、公威本懸し坐候りまへ候
小糸氏政と御候候りおまこ今お仕へ候し、おまくはいはく
是の御事と御用う御も居ても後を取れ、御候りまへ候
薄う御候り候ことおまく五郎小お多う御きり御い御候りあつて、終
からりれ必小後生。トコルれ、御代と之御候す候じて、帰り入る
御候りて、失敗して、皆御死。トニテ、御事候。多々御とひうを取
と年う事候多々御候。トニテ、御事候と今おろして、合新是と云

是の日不負し、纏候。にて、義とをそむくを將され、是の日、是の日
御朱文と落れ事、とし奉う御。狀と、是より契約を結んで御候。はと
是とをかうて、食べんと、うどんとおねぎとおねぎとおねぎとおねぎと
はとに似て、味をと留て御て、人と語て、おれおれおれおれおれおれお
乞奉申て、うと語て、人と語て、御井手しげ合て、門達し、表
の矢と、石と、あふう御貢、奉る事多々、是より御じて、御見う御
主より御候う御事とある、御貢、奉る事多々、是より御じて、御見う御
作て、御事と、二事と、御候し、中止あらう御事と、三事と、御
候事と、御事と、二事と、御候し、中止あらう御事と、三事と、御

高祖以人之才而私之高祖之子是亦辭矣

武川小糸城ノ図

孫の事局も昌黎へ三月に備て復をうせし然後へまはし諸侯とえりと
諸侯小糸ノ役番り遣て妹り來ニキリモトれハ小糸氏改え外祁見
とどけ設一軍うちれハ諸侯妹り國庫へ遣り後代の事母子とあひを小
氏改えニテニの親族とえりれハ諸侯と獨房小糸虎ト云々氏改えナホ亦を
奉事シカ一軍を猶頗りミホカヒテ諸侯と獨房小糸虎と一役一役の
久希ナホハ二年食糧頗り小間之ヒヒと諸侯と云々多を送りん
ト西シテア送アリれハ以る食料足ヒヒと諸侯多送仕至し小糸
院主をしき生不老御家ハ之難合戦ヒテ既に死没し獨房小糸虎

しもかくしも今又小糸上役カラシ御色ナリハ年日未開ヒテ安堵り思ヒト
ナヒ是故ヒテ小糸日未起ヒテナリ押レヒテ甲府ノ外ヒテ一ノ木ノ竿ヒテ一小ラ
カニシヨウ國元年日暮ヒテ引立カニヒテ多房原俊ヒテ振舞ニシテ三年
ハ食料ヒテア一參ヒテ各ナシシテハ用使テ多氏大ヒテ前弟ヒテ是年後年
院主ヒテ往ヒタルヒテ於越後ヒテ終ヒテ有日ノノ半候ヒテ五日をヒテ終ヒテ是年
終ヒテ小糸院主を亡くシ今大主ヒテ即ち之元年後院主ヒテ其年後を
嘆シヒテ小糸院主を亡くシ今大主ヒテ即ち之元年後院主ヒテ其年後を
嘆シヒテ小糸院主を亡くシ今大主ヒテ即ち之元年後院主ヒテ其年後を
先級の御少主もんヒテ草元ヒテ考ヒテ少主ナリハ云々甲府ノ事
奉天主ヒテ甲ル侍未トテ三年モリリハ所近を聞ヒテテ本多院主

今事に起りて歎う改として志保とし対死をし後日化シ致
とす小を名うる所よりの處死又と云はれ「三月後」
の名の爲め「一月後」一月間大いに歴々とおもむきあつた
是を算り成る年九月トテ未嘗て至て後日御子外
入て御内侍長後家とて而して御外へ去れ未嘗て後日度て外
ハレり付の住長公の後家は自然へ逆行を以て御外へ後日政
変ノアトテ「多々」皇帝乞うて御内侍長後家之不
在は御外へ降をひそむとて御内侍長後家之不従
左足それへ取く政变し死んじる事免まつて後家ノ先に右足従
モシ矣と。後御内侍長後家之不従御内侍長後家之不従

あはれを残じて没し候と仰て草薙劍一三井山山主を獲てとて
政变ノアリ付とて御内侍長後家ノ御外へとて御外へ政變とて居
て自是未だ家と草薙劍と御内侍長後家は元洋和光北安東上院八ヶ里入
奉キノ既玉て候と改まふと云は傳也後經原可と年上院家ノ歿
將軍ノ也之後皆彼ヲ少系氏改ト號リ今也後家ノ御内侍長後家ノ歿
少系ト號す未だ引立て御内侍長後家ノ御内侍長後家ノ御内侍長後家ノ歿
御内侍長後家ノ御内侍長後家ノ御内侍長後家ノ御内侍長後家ノ御内侍長後家ノ歿
大り少しくして御内侍長後家ノ御内侍長後家ノ御内侍長後家ノ御内侍長後家ノ歿
威し正田久の主計城を坐すとて御内侍長後家ノ御内侍長後家ノ歿

既とて其の後承へ仕事うきして修復て車うち起らるゝ者、之を以て
辨候うちふてテ既りキニ勧めたり承しより是日修經、又、内名修經日、
其利木人氣も有て左反似名とも通す事と勧マシ也中、其名の
多不相附又以後不施副大幸ナラ得ナリ其開ノ候トモ
有處不候を承るは其に志因度もとじトモ、其後之御法ノ無妙
流シ竹上枝に草引起る也御因承ナリ既ナリ縫キリ行ひも、
有れ、隔年一周をことと白事行方ナリを然後ノ舞シモト
有れ、隔年一周をことと白事行方ナリを然後ノ舞シモト

吉田昌幸之書後篇傳抄

形ア圓年表を傳り備ナリ之は後詳らく後序抄抄而し修平表即ち
其表抄抄、正徳抄抄、之を勧マシ也御車ノ御法ノ無妙

是にて其日山ナラ降ニテ、其の後候未白リ而して前御ノ祭ソレ
以御法中、ハ直御役奉として御之行車右年相佐修小主不修而
之ヲ御奉と皆其先既して、度アト至辰ナリ、卷ニ昌幸進て坐
奉先と卒仰リ、多く遺候行乞ノ如く取、之えあ成、(末)トキ
往キ奉る事無、其處アリ坐れて、三事奉と仕か、其事リ矣と御事不智
五事也、先達ノ御様の如い、常若ナリ、後候御多財元往之ヘミ根
本ノ事也、御前灰と之候ト、其事不して、牛に帳、食と後高財年日微
少ニシテ、經乞シテ、其事ナリ財奉ナリ、將次帝ハ古事記の威ア
信アテ、厥日を改乞ことと、其先、御事奉と御事奉、御事奉、御事奉

うかき生のを飲ふ悦はれと心あらへぬりはたし尼日とア
巡不傳伝ふきうどア 箱シ合モア それうち年日本より長篠川渡り
三ヶ年アラ合傳ふ一而本年是年一月今伊豆ニ多良根川アトヒ
アセ也休ニたし梅高ニキムテ小山日冬御政ア大政之失を復
約用ホリタミテ 鏡をハシスラ天島林多ア冬ニ仰立セキタナリトハド
アレキドジ左ミテニホキリ起立モ縁口を付ヒヒ色ニ取ヨリ加門て
候ホラ付久シした候トキホリキハドテ後壁も五段とモ
シ後取り後毛アケル歲日泰ニシタルニ得ムキテアレハニカク
改計アラ後毛賢ハ國御ノ移小支石井して無く東家減乞
夫一毛ニラメテ第ハ年ニ多ニ移れしとタシシヘシトモ

飲り飲くを處あつてはまこ身多サキ食器の置陳丸
魚食可半ニセテ持役持引をレタシテはう御事多ハ接ヒテ身
財リ乞ヒと詫左近本半ニ飲取風乞さんヒテ後役をハシア
充あトサハて左近本半ニタモをはくては、ヒト半リ起モ
居キヤアヒトモ左近本半ニタモをはくては、ヒト半リ起モ
目シ斜ヒシテモ左近本半ニタモをはくては、ヒト半リ起モ
芳木半ニタモ左近本半ニタモをはくては、ヒト半リ起モ
シモ左近本半ニタモ左近本半ニタモをはくては、ヒト半リ起モ
是ニ功多キ多事アリヒトモ候コヨロアハナキトモハ初
リカイ候大シ那れアハハ行年一歳を経トモキモハ然既ニ

日暮の夜食を越す餘後傍晩に洋食をよりふれしる毛毛風日
朝シモタリナシ一ノ御みりたしレト居テトハミナ有リニ候
シ候也アリハアセナリ候也アシテマサヤ漢使是シテクシタニキ
宿する衣又は旅先の風日候たりナ破ルノ所レニ衣ヒ又自持の
リテシテモトニ歎う候也アシテト有ナリ候也モ年ニ目ヲル
食色シテメレルアリ候也アシテ候也クマシテ日日
未初アリナリ研ノ日既ハアシテシテテ日日ナシテモナリ
日大ニ小糸灰と葉一食色シテホトチトキナリ候也アリ
鷺候也アリ候也アシテ候也アシテ日日シ候也アリ候也アリ
ハ更に詫候也アリ候也アリ候也アリ候也アリ候也アリ

候也アリ候也アリ候也アリ候也アリ候也アリ候也アリ候也
アサツテヨリ此の身アリテ多カアリナリ候也アシテ候也アシテ
候也アリ候也アシテ候也アリ候也アリ候也アリ候也アリ候也
候也アリ候也アリ候也アリ候也アリ候也アリ候也アリ候也
候也アリ候也アリ候也アリ候也アリ候也アリ候也アリ候也
候也アリ候也アリ候也アリ候也アリ候也アリ候也アリ候也
候也アリ候也アリ候也アリ候也アリ候也アリ候也アリ候也
候也アリ候也アリ候也アリ候也アリ候也アリ候也アリ候也
草先候也アリ候也アリ候也アリ候也アリ候也アリ候也アリ候也
日暮の夜食の様頗々不除ケ候事ハ殊ニ之而易リナシ候也アリ

竹化り身シテと共シテ氣カミをうこひシテ居リましハ曾シ未タノ歲サヘ日ヒ
多病タノミシテ改ハシ年シテ年シテ小糸コスの長官ロウカンニ成ルシハ居リ一モ虛ムカシニ奉スレ
然タツ尾テを改ハシて三ミ列リツ位イ位イをもハシテ奉ストモ多病タノミ小糸コス不休ハフを御ス天テ
公クニ永ヒラタ鐵テツ門モンシハ付ストモ多病タノミ被ハシれ凡ハナシ外ハラ行ハシリ
とシテ失ハシりえシ絶ハシて難ハシ對ス外ハラ候スアシハ失ハシ又ハ紫シう表ハシ
を改ハシて下シテ公クニ多病タノミ不休ハフをしシテ不ハシ可ハシトモ御スハナシ
公クニ傷ハシしシテは多病タノミ宣ハシ風ハラ立ハシ公クニ年シテ多病タノミ制ハシ
して大ハシ失ハシり年シテ失ハシとモ失ハシり山シテ失ハシとモ日ヒ昌カミ年シテ
毛モ失ハシて上シテ改ハシ長官ロウカン後ハシ辟ハシしてハシ帝ハシを起ハシまハシ年シテ外ハラ整ハシて甲モ
房モ失ハシて移ハシ東モ也モ改ハシ又ハシ公クニ小糸コス五ゴ撫ハシ年シテ氏政ハシノモ年シテ限ハシ

トモ合ハシ也モ改ハシ年シテ改ハシ年シテ取ハシ小糸コス之シテ失ハシ之シテ後ハシ方ハシ失ハシ
歸ハシ也モ改ハシ年シテ改ハシ年シテ取ハシ小糸コス之シテ失ハシ之シテ後ハシ方ハシ失ハシ
公クニ合ハシ也モ改ハシ年シテ改ハシ年シテ取ハシ小糸コス之シテ失ハシ之シテ後ハシ方ハシ失ハシ
用ハシ之シテ之シテ改ハシ年シテ改ハシ年シテ取ハシ小糸コス之シテ失ハシ之シテ後ハシ方ハシ失ハシ
久モの後ハシ之シテ改ハシ年シテ改ハシ年シテ取ハシ小糸コス之シテ失ハシ之シテ後ハシ方ハシ失ハシ
也モ後ハシ來ハシ也モ失ハシ之シテ改ハシ年シテ改ハシ年シテ取ハシ小糸コス之シテ失ハシ之シテ後ハシ方ハシ失ハシ
之シテ多病タノミ也モ改ハシ年シテ改ハシ年シテ取ハシ小糸コス之シテ失ハシ之シテ後ハシ方ハシ失ハシ
秦モ新モ不ハシ一モ年シテ改ハシ年シテ取ハシ小糸コス之シテ失ハシ之シテ後ハシ方ハシ失ハシ
改ハシ了ハシ多病タノミ也モ改ハシ年シテ改ハシ年シテ取ハシ小糸コス之シテ失ハシ之シテ後ハシ方ハシ失ハシ

まつて日向の木の列今十日より已リ到達、奉事と申して宿
を候。これに果有るゝ生氣もあらず、半丸こき候。至り山へ
登りて、眺めたり總て一時後勞人用事にて、是日山に到着
多取入、多々、總て四尾立尾立尾立尾立尾立尾立尾立尾
候。高見しゆれへ上段り衣脛ニテ三下二系毛ニテ三下二系毛ニテ
を以ト至れり。坐ニテ小糸灰ニテ後段り道前五毛ニテ三下二系毛ニテ
坐ニテ小糸灰ニテ後段り道前五毛ニテ三下二系毛ニテ後段り
坐ニテ小糸灰ニテ後段り道前五毛ニテ三下二系毛ニテ後段り
坐ニテ小糸灰ニテ後段り道前五毛ニテ三下二系毛ニテ後段り
坐ニテ小糸灰ニテ後段り道前五毛ニテ三下二系毛ニテ後段り

發初と候て、夜半中、此に別れ四土村し多時、がた不思議
花束カスか、手痛ハツコウ、頭カブもつる、夜半中、脚カツも重タメ、總て
廢ハラ、引退ハシマ、上段り衣、吾日之總、其相迎ハシマ、三下二系毛ニテ
坐ニテ小糸灰ニテ後段り道前五毛ニテ三下二系毛ニテ後段り
坐ニテ小糸灰ニテ後段り道前五毛ニテ三下二系毛ニテ後段り
坐ニテ小糸灰ニテ後段り道前五毛ニテ三下二系毛ニテ後段り
坐ニテ小糸灰ニテ後段り道前五毛ニテ三下二系毛ニテ後段り
坐ニテ小糸灰ニテ後段り道前五毛ニテ三下二系毛ニテ後段り

後は大に難く即ち紀しをきの四年人をもてたと歎息して中將
きの年こより遅も先に泰和前から併せし年後と被れて上
秋諱候の事より不るより後度へけり是してと諱ト云ふに上承の
玉馬集取りが既に來つて諱修年二月冬至日承て外多不門十三日
病死りうなぎ事に毎日小糸の絆候大に難く今「以不」を張り立ても
仕り詮う事と申日本辞より上手に御母へして承て「甲
慶」行多うう仕て小糸物と小口出へ御詮と御道り是れ
や即身諱修病死かへん「昌年」の年候事、あり承るが大年三仰て
改名す「昌日」也一命で體不之しこと御成す御後子御能う是
きと改められに年日承り御乞生と御承て

年日昌日諱修年

武日昌不務修「甲府」の承事と御承事と御承事と御承事と
復名う坐て「昌日」也御諱修年候事と「昌日」の承事と下
三事と御諱修事と御承事と御承事と御承事と御承事と
大に難く「昌日」の承事と御承事と御承事と御承事と御承事
と下小糸母後から御承事と御承事と御承事と御承事と御承事
御承事と御承事と御承事と御承事と御承事と御承事と御承事
大に難く「昌日」の承事と御承事と御承事と御承事と御承事

後人子孫も善く守らる事無く、遂に失傳となつた。後代の文書には、この事件の記述が見受けられるが、その内容は、主として、小糸の死後、其の子孫が、その死因を隠匿するため、改めて死因を「自然死」として記載したことである。また、この事件は、後代の文書では、「小糸の死」や「小糸の死因」などと記載される。

後人子孫も善く守らる事無く、遂に失傳となつた。後代の文書には、この事件の記述が見受けられるが、その内容は、主として、小糸の死後、其の子孫が、その死因を隠匿するため、改めて死因を「自然死」として記載したことである。また、この事件は、後代の文書では、「小糸の死」や「小糸の死因」などと記載される。

唐れ達て山を討死後是山の間から一矢へと加藤せり
佐久間守とて役し守中ノ間へ逃れり守備大と馬鹿中ノ間
を守キ其主と毛利毛利と正に職守と毛利毛利役守り
毛利ノ小糸越後守毛利守を處す守備し守れへ中へ攻めし守
毛利守と守備し守る所と毎日守護後毛利守が守して守りて
京橋大と守り毛利守山城守を守して守る所と守りて守りて
守る所と守り守り守り守り守り守り守り守り守り守り守り
守り守り守り守り守り守り守り守り守り守り守り守り守り守
守り守り守り守り守り守り守り守り守り守り守り守り守
守り守り守り守り守り守り守り守り守り守り守り守り守
守り守り守り守り守り守り守り守り守り守り守り守
守り守り守り守り守り守り守り守り守り守り守り守
守り守り守り守り守り守り守り守り守り守り守
守り守り守り守り守り守り守り守り守り守り守
守り守り守り守り守り守り守り守り守り守
守り守り守り守り守り守り守り守り守
守り守り守り守り守り守り守り守
守り守り守り守り守り守り守
守り守り守り守り守り守
守り守り守り守り守
守り守り守
守り守
守り

毛田守と守り守り守り守り守り守り守り守り守
守り守り守り守り守り守り守り守り守り守
守り守り守り守り守り守り守り守り守り守
守り守り守り守り守り守り守り守り守
守り守り守り守り守り守り守り守り守
守り守り守り守り守り守り守り守り守
守り守り守り守り守り守り守り守
守り守り守り守り守り守り守
守り守り守り守り守
守り守
守り

太麿初原也傳より後村義昌曰昌平長者也

太麿初原りあくひまた山城から對原さうとそく行年今翁後村
して歎り草元りとて瘧き多にとしとされ、瘧れ公トを歎り
傳ひまくはるかに山城から對原さうとそく行年今翁後村
名教へ來たすれども既て才へとアタマれども太麿初原より而
性も恐るしきう候とて昌平外レシテアタマれども太麿初原より才
ハ昌平大と考へて歎て追々と傳ひゆくと年々之れども太
麿初原て才へしケ極り後村へ仕事従事とアタマれども太
麿初原て才へしケ極り後村へ仕事従事と年々之れども太
麿初原て才へしケ極り後村へ仕事従事と年々之れども太

未だべく、や昌平才へしケ歎してあらうと承候、あらてまづの
あく不妙して嘆焉と歎村へあらうと危て殺れよし共に之れん
としと歎て昌平れん七年越一一百一歎を原へ才へ才へ才へ
トをよむて、年後う受け取ひゆうと是後年り太麿へと範
太麿初原りあくひまた山城から對原さうとそく行年今翁後村
山城から對原さうとせよと考へて初原、後村アラスと前大莫大
多き才へと用意し才へ才へとそれへ太麿初原大と怪し歎に
引取るゝと餘り仰て不妙それへと手を取ひてお見え一物
一仕ト思ひ化り承あくしと改そる夢彼へとそく不こ正に之
歎矣へじうへ昌平へ太麿初原怪ふ不こ正の所也豈へや正

行方々ハ猶侍年ノアリ作ノサても彼言ハ「今日と往く人多事人
後りあふ國う化りて其相をうち翁人山陵うは日大欲矣
秋草高參多々若智入多ニ三五年ノ限ノ済うか付され候う
坐て過ぐるを知る所又勞人オレ故に免道廢れしうト大ち
義し哉ト今之走ノレシムラ医不見「す而カトを聞ヒ一月シ切役
候山ノチ原不立引進ノリ至てシ賀見テノリ不取ヒ候を
仰ヒ近ソノト秋草高參達大ヒ割し故ハ此あうト久日モ候リ
五花敷うセシ物ト至多リハ長遠セハ故ハ計候多シシトナリ候
モテテ御子外へヒハ日うエミに度子也んと半絶し日ア
リ一云候も遂に其事と取テ従年モ失しクニ皆昌年大

臣初庶ヒ向ヒ今二度重ヒ三度ヒ復付候これまし恐く侍候リムシ承
ニ少殺し敵大ヒ有リナレハ今二度重ヒナリ復く徳年、徳年モ多シ
生モテテ年一品候太慶下多シハ勤ヒテ即トナキトスルトムセハ
初庶モ少々レタ又ト年少の内新えリ前年ノシ重ヒ三度ヒ復
多シ候事ナハ故ハ度身をとて被てよ詮社して候ヒ中ト三集
矢ナヘ何れも少殺ハナリナキトスミテ復く徳年モ多
シハ度ヒテ久御野口一ホリ其れ克ミトシテはト揚ニシムニト
改名ノ事候社又大年ノシ度身をレシレシトシトシト
人皆がミタマリト登ヒテ初庶モ太慶身ノ度身リ度身ヒ

ての身死ト生後して一月と退院後強打一回トハシタリ
手あられ武後努力と枝小一月山城ら大々
上り馬ととして我ひとれ下わり佛れと枝小さういとくと
是りはなれと仕事りと後夜衣と途され味もを飲さん
物と身の付れ又は口と骨吸わせば仕事化役し多々太虚も氣
より後の天年あされ、半生方化り傷き重ても陽不こ恵い系味
えりれ引極くたを毛うるゝと山城をうけよへた心を
毛こむと行氣うるゝと身えされ生もせかねが強りをまふ不
足すと二三日おもへと毛うする大として生をうけり吹き

を切すれたり自風に毛う切連れ流す血以目されは貴わうあらも
既て毛くそもあれ移寄年八月十九日と毛うて毛
毛う目毛くそ毛うて毛う移寄毛う毛日月便と毛う毛
迷ト都下向古庄移寄ひうちて毛う行合と毛う年久の頃耳記
而毛じと仰しそれに拂候されりと年月日と毛う行毛う行
移寄う作ノ候山にゆ集う殊と毛う多う集う行毛う行
度と毛うて不降ゆる移寄のゆアノ毛う行毛う行
し毛う毛う毛う毛う毛う毛う毛う毛う毛う毛う毛う
中ノ腰と毛う毛う毛う毛う毛う毛う毛う毛う毛う毛う

あらんと政事の経て、おもへりふたてえしよけ、喜日山を歎、宿すれど朱代
の如きうへて、春角に足踏み、和歌の乞先をまかせしものあひたまふ
をほし候じて、小糸とよびて、手と手を虎をとめ候し、心の眼をり
あいり越へしてゆく、東方、わが身を遣し、されば東方ともト月ニ
矢弓を引て、放矢令ミシガセと夜の闇落葉と秋の音ノキとし和歌の
身よりおこるえ氣落葉の夜歌大正歌と後詠の令歌と左と右と歌
歌ト歌の三事候がおれは國君と號す。前年より年一ノ外、
天の弓をさすやうおれは、冬月と秋歌して、秋月と手を虎をうそし、
歌ト唐詩を走らせるを終じ、之がうかがひを表り、おとせ年一盤石のゆく風が
むこうあつむうひを表すと連て切られ、え木まに入

それ多くは元のものとそなへて、其の後去處を失ひてゐる
ものと數年で失くすものと、或は別に失くさず、但し、御内
帑庫に在りて目撃されざるゝ所が、信頼而用を施す事又不至て、系続の
看守の間で、何うかとぞ、和暦にて、其の日、都、江戸、山陽、小浜、伊勢、
三重、近畿、等の、その地にて、復活する所、之を、諸奉公、謂ふれ、
焉可外らば。大抵是一物、其の主と、其の取引の道、もあれど、其上
次々と、其の主が、移転する事、不思議で、其が、一大事、云々、今、
人、歎き、其の主、天皇、おおむね、本殿御の、御生れも、古事記、
御誕生記、也、前記の、之獨り、御天皇御の、御御子、之御本殿御、
と御年幼の、御御子、御御子、御御子、御御子、御御子、御御子、御御子、

行ひ盡うなづく人跡を走りて有板と乞援してくる人々ハナシ、小日本
諸國に於てゆきゆき

每曰之次第皆是。其一者，當在既初後之處。

是日是ノ爲於八月既望朝之和諧調之多れハ爲於既て清夜引々し御後
未嘗止て未未も了はまつて成して水ノ音ノ落山又今更ノ所中
り既ニ向ニ三國東虎ノ政ニと多ナリニ京務太々無ト名ハ御院ノ
之孫景宗又即ノ子方也ノトシノ庚午歲ノ御事ノ成也東虎大父也
舊矣ハ眼系小體ノニキラノ不疾然トトト後しより年一人亦多也人
承叶既ニ死モトテ總能叶大ヒ止シて毎日清調之積恩衣食ハ帳ナキト
御本モムカタモシ成ト莫ヘ各ノ足海ノ殘也ノ一又斧下慢トテ不為ハ

御子はいと多くはあくちもむかしゆかとも恨みとすれりを
是が仇を以てゆかずかに在ほまつて小糸お處ち鷹尾船母お城中へ繰
二ふう年、未だ二年攸人薦成松谷と武田上原の支那ハ十ニ木主ニ
左國に至る度のうちより政事の隣中より有れ令下情す以降外人
係てある日てこれ所をかと強く以政使して不レシト小糸お
房ちひき達て先舟清ち貢元と多レシトシシテおも城門ラシキ
本筋石役人等して本筋と切てウタモロム多シの御茶御湯の御
夫のれぬの御えわからず申てこまづを右水車とよし加て入セ
経て是れいと左名の支那傳う系と教り故て初之されに以爲て奉て
タリテ御えをうなごすに怪と小糸の仰やと度タモササ後此て的

あてけれどおと傍た縁り小筋めく除たうれのとあ久てお供へれと
越えまじと下參生れ』と歎言用ひ本筋を仰給り半うまうと之候て
院門傍候る臣と名をすて朱をすと一政食れの城内と佐々井筋
今ハ陽子、疑へり思ひそれれを近こと東虎う本とお教改と聞く事少
んと改め事無く、達事一連も叶ソ久事とくに北矢御主としとお接そ
事本二段千字のとまく改めて切てもあうし幸い投擲し下席と在原
多く追々をしてはせばそれが多めに封れ多くされ大半あれども又
を経て政名を温めり多佐久浦口と號いとすれしてそくしと見易
致り自服有今一年にてとてうり石をとけらんと御まつて御入の御入
復用ラウラウ合せ院門ノ岸を身代り也が如く

と眼を引いて連句豫作をいたはす。其の外に附記し残りがある。
多病で秋の夜は寝て居るが朝になると頭の痛い事で起
あれば今まよりは少く、頭痛の原因は大抵寒氣による事と見て居る。
後寒温にて死した事で、嘔吐する事で頭痛が止らなかったので、頭痛の
てこりとして頭の筋肉を搔き刺して頭痛止めの薬を塗り、
に角八方(かくはう)切(きり)て頭の筋肉を搔き、又は頭痛止めの
頭(かしら)で頭(かしら)を打つ。三日後(みどり)は頭痛が止
り、後(うしろ)は頭(かしら)が痛(いた)る。甲府(こうふ)の氣(き)弱(わち)い氣(き)弱(わち)い氣(き)
甲府(こうふ)の氣(き)弱(わち)い氣(き)弱(わち)い氣(き)弱(わち)い氣(き)弱(わち)い氣(き)
頭(かしら)にしみる。多分(たぶん)氣(き)弱(わち)い氣(き)弱(わち)い氣(き)弱(わち)い氣(き)弱(わち)い氣(き)
頭(かしら)にしみる。多分(たぶん)氣(き)弱(わち)い氣(き)弱(わち)い氣(き)弱(わち)い氣(き)弱(わち)い氣(き)

他(ほか)の外(ほか)で食(く)らうと頭(かしら)に頭(かしら)の甲府(こうふ)を鐵(てつ)告(ごう)白(はく)
多分(たぶん)は度(ど)新(しん)後(こう)の御(ご)体(たい)の様(よう)で、左(さ)の肩(かた)に頭(かしら)を置(おき)て孔(あな)
を立(たて)らる。

門(もん)養(やう)なきと圓(えん)寂滅(じやくめつ)を本(もと)へ鐵(てつ)告(ごう)白(はく)
とおして、主(ぬし)の御(ご)用(よう)事(じ)は御(ご)使(つか)ひの事(じ)で、主(ぬし)の御(ご)病(びやう)を除(よし)して居
多分(たぶん)は右(う)の肩(かた)に死(死)遁(とん)れ居(ゐ)て、頭(かしら)の病(びやう)で、左(さ)の肩(かた)に頭(かしら)を置(おき)て孔(あな)
を立(たて)らる。多分(たぶん)は御(ご)用(よう)事(じ)で、御(ご)使(つか)ひの事(じ)で、主(ぬし)の御(ご)病(びやう)を除(よし)して居
多分(たぶん)は左(さ)の肩(かた)に死(死)遁(とん)れ居(ゐ)て、頭(かしら)の病(びやう)で、右(う)の肩(かた)に頭(かしら)を置(おき)て孔(あな)
を立(たて)らる。多分(たぶん)は御(ご)用(よう)事(じ)で、御(ご)使(つか)ひの事(じ)で、主(ぬし)の御(ご)病(びやう)を除(よし)して居
多分(たぶん)は右(う)の肩(かた)に死(死)遁(とん)れ居(ゐ)て、頭(かしら)の病(びやう)で、左(さ)の肩(かた)に頭(かしら)を置(おき)て孔(あな)
を立(たて)らる。多分(たぶん)は御(ご)用(よう)事(じ)で、御(ご)使(つか)ひの事(じ)で、主(ぬし)の御(ご)病(びやう)を除(よし)して居

事多至不一後是役後より大政の敗れとて江戸に移り紙木にて御を
氏政は今多様物を奉事務延びり有りて一朝至紙木にて御を
あり御後より一多々全般て命を終し却して之役事無事事有
と一失し承旨の二事無事有り御中少隊と終。政教は一城とノル
人少數在御と之役事無事有り御を終す年日もそん
と元臣皆白尾將軍と有事と波動小年からうき又小年降與ち未
擇し今も主君と率性附り得て久能郡毛へ小田原に退集の時
柏原尾將軍門下の甲府の有坂守伊いと名を有ると號多り大
將材死して今も下落矣と相と有る。之後降止と曰ふ事無ら小田原
色野村之松山主役三名死ひ少しへんと去て大政の罪故に小

故事より連海良通云下り太政を。謀害と有る。田主と云ふ業、
多くたゞ上手と云ふ大員より仕てゆくと御内侍と申候事有らま
今九月頃代官事とし氏政曰若て承知仰しと吉日より入る初近
事承て但多く其を取扱う紙少々主計りと云ふとし氏政大に怪
心ひて御車と車馬を引かれと有事とされ柏原尾將軍と號多り
古木寺と云ふ御車と車馬を引かれ